

<実践事例>

## 初年次キャリア教育科目における学生の成長過程 — 「自己発見と大学生活」の履修者に対する質問紙調査—

小山 治<sup>1</sup>

本稿の目的は、授業の履修者に対する質問紙調査によって、初年次キャリア教育科目における学生の成長過程はどうなっているのかという問いを明らかにすることである。本稿では、京都産業大学で開講されている初年次キャリア教育科目である「自己発見と大学生活」を調査対象として、履修者に対する3時点にわたる質問紙調査を実施した。その中で、学生の成長過程をCAVT (Career Action-Vision Test) と能力習得度によって測定した。本稿の主な知見は、次の2点にまとめることができる。第1に、(CAVT) アクションと (CAVT) ビジョンは、第1～3波調査において微増傾向にあったものの、時点間の変化は小さかったという点である。第2に、(能力習得度) 学術的基礎能力と (能力習得度) 社会的能力は、第1～3波調査において上昇傾向にあったという点である。以上から、本稿の結論は、初年次キャリア教育科目において学生のキャリアに関する行動や意識はそれほど変化しない一方で、大学生に求められる汎用的な能力は向上する可能性があるということになる。

キーワード：初年次キャリア教育科目、成長過程、CAVT、能力習得度

### 1. 問題設定

本稿の目的は、授業の履修者に対する質問紙調査によって、初年次キャリア教育科目における学生の成長過程はどうなっているのかという問いを明らかにすることである。

文部科学省の「平成27年度の大学における教育内容等の改革状況について」によれば、2015年度において初年次教育とキャリア教育を導入している大学(学部段階)はそれぞれ約97%にも達しており、既に飽和状態になっている。初年次教育の具体的な内容として多数を占めているのは、文章作法と口頭発表の技法である。ただし、将来の職業生活や進路選択に対する動機づけ・方向づけも大きな割合を占めているという点が注目される。なぜなら、この結果は、初年次教育の中にキャリア教育の要素が少なからず導入されていることを示唆しているからである。

それではこうした初年次キャリア教育において学生はどのような成長をしているのであろうか。初年次教育についてはいくつかの実証研究が行われているものの、その効果については必ずしも明確になっていない。例えば、全国の社会科学分野の大学生に対する質問紙調査のデータを分析した

小山(2013)によれば、初年次教育の主たる構成要素である学習技法型授業の受講経験は剽窃予防やノートテイキングと有意な関連がない。一方、特定の大学の初年次教育科目の履修者に対する質問紙調査のデータを分析した小山(2014, 2017)によれば、授業関連の学習行動がレポートに関する学習行動を促進したり、レポート点を向上させたりすることが明らかになっている。

初年次キャリア教育に関する実証研究はさらに限られている。特定の大学の初年次キャリア教育科目の履修者に対する質問紙調査のデータを分析した桑原ほか(2014)によれば、初年次キャリア教育科目の受講生と非受講生の間には進路選択自己効力の差がない一方で、当該科目の受講は半年間の進路選択自己効力の変化に影響を及ぼしている。また、類似する質問紙調査のデータを分析した乙須・細野(2018)によれば、グループワークの経験が学生の認識や心構えをポジティブなものに変化させている。

こうした状況を踏まえると、現時点で必要なのは特定の大学の初年次キャリア教育科目に関するデータを収集し、その実態を価値中立的に記述することであると考えられる。教育の効果を科学的に論じることは一般に思われているよりも非常に

<sup>1</sup> 京都産業大学 全学共通教育センター

難しい。近年、中室（2015）や中室・津川（2017）が教育の効果を論じる際の因果推論について平易な解説を試みているにもかかわらず、大学教育については効果ありきの不適切な議論が少なくないように思われる。本稿は、こうした不適切な議論に与するものではない。本稿の意義は、初年次キャリア教育科目の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査によって、学生の成長過程を実証的に記述することにある。そのため、本稿では、原則として、(教育) 効果という用語は意図的に使用しない。

本稿が調査対象とする初年次キャリア教育科目は、京都産業大学で開講されている「自己発見と大学生活」（以降、「自己大」と略記する）である。この科目に着目する理由は、後述するように、①1年生の多くが履修し、②授業内容が相当程度標準化された科目であるからである。一方、本稿では、学生の成長過程をCAVT（Career Action-Vision Test）と能力習得度によって測定する。CAVTは、下村ほか（2009）が開発したキャリア教育の効果測定のための指標（尺度）である。能力習得度は、後述するように、大学生に求められる汎用的な能力である。CAVTと能力習得度に着目する理由は、これらは初年次キャリア教育科目の成果指標と考えることができるからである。

本稿の構成は次の通りである。2章では、調査対象である「自己大」の概要を説明する。3章では、「自己大」で実施した質問紙調査の概要を説明する。4章では、分析で使用する変数の設定を行う。5章では、「自己大」における学生の成長過程を記述する。6章では、本稿の主な知見をまとめて結論を示し、今後の課題を指摘する。

## 2. 初年次キャリア教育科目の概要

本稿が調査対象とするのは、京都産業大学で開講されている「自己大」である。

この科目は、全学部の1年生のみが履修できる前期の選択科目（2単位）である。2018年度は1クラスの定員が66名であり、全28クラスが開講された。1年生の約57%が履修した。

シラバスは全クラスで共通であり、中沢・松尾（2017）という教科書がある。授業内容はティーチング・ガイドブックという担当教員向けの指導書によってかなり標準化されている。例えば、各回の授業で扱う内容とその時間配分が詳細に規定されている。また、担当者会議という授業の振り返りや事務連絡に関する会議が学期中に3回開催されているほか、情報交換会という任意の会議も

学期中に2回開催されている。

ウェブ上で公開されているシラバスによれば、本科目の目的は、「『自分とはどのような人間か』『どのような大学生活を送るのか』を、様々な形のコミュニケーションやグループワークを通じて考え、自分なりに表現できる」ようになることである。

シラバスによれば、「自己大」は大きく分けて次の2つのパートから構成される。

第1に、「様々な活動と情報を基に自分自身を省察し再発見するパート」である（第1～7回の授業）。ここでは、先輩学生との対話や社会人に対する聞きとり調査等によって、自己理解とそれに基づく大学生活の方針を意識化させることが試みられている。

第2に、「チームで創り表現する活動を行い、それを省察して今後の活動につなげるパート」である（第8～15回の授業）。ここでは、グループワークによるポスター発表（準備を含む）が主な活動となる。クラス内で履修者が5～6名程度のチームに分かれて、「京都産業大学の楽しみ方——新入生におすすめしたい学び方、過ごし方」を大テーマとしたポスター発表に取り組む。

成績評価は、毎回の授業の振り返りを記録するリフレクションノートの内容（50%）、社会人に対する聞きとり調査に基づいたレポート（15%）、ポスター発表（10%）、「私の大学生活」に関するスピーチ（10%）、最終レポート（15%）に基づいて行われる。筆記試験はない。

## 3. 質問紙調査の概要

本稿の分析で使用するのは、「自己大」の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査のデータである。調査名は、「学習状況調査」である。質問紙の設計は筆者が行った。本調査は、5名の担当教員の7クラス（2名は各2クラスを担当）において、原則として、第1回授業日、第8回授業日、第14回授業日の3回実施された。いずれも集合調査法による自記式質問紙調査である。氏名等を記名式にしたため、3回の調査の回答をマッチングできる。以降では、1回目の調査を第1波調査、2回目の調査を第2波調査、3回目の調査を第3波調査と呼称する。

第1波調査の有効回収数は457ケースであり、7クラスの履修登録者数462名を分母とした有効回収率は98.9%である。第2波調査の有効回収数は410ケースであり、同様の有効回収率は88.7%である。第3波調査の有効回収数は388ケースで

あり、同様の有効回収率は84.0%である。3回の調査すべてに回答したのは、358ケースである(同様の有効回収率は77.5%)。本稿では、この358ケースを分析対象とする。ただし、分析では欠損値を除外するため、常にケース数が同じであるとは限らない。

表1は、履修登録者と各回の回答者の基本的な属性の分布を比較したものである。それによれば、履修登録者、第1～3波調査の回答者において、性別、学部といった変数の分布はほとんど変わっていないことがわかる。換言すれば、調査が進むにつれて特定の層が極端に脱落しているわけではない。この点と前述した高い有効回収率を考慮すれば、本稿のデータには相当程度の代表性があると考えられる。本稿では、「自己大」の履修者を母集団として想定し、かつ標本が無作為抽出されたと仮定して参考までに統計的検定を行う。本稿の母集団は「自己大」の履修者であるため、分析結果の過剰な一般化には留意が必要である。

なお、今後の追加的なデータクリーニングによって分析結果が修正される可能性があるという点には留意されたい。

#### 4. 変数の設定

表2は、分析で使用する変数の操作的定義をまとめたものである。

本稿では、初年次キャリア教育科目における学生の成長過程を測定する上で、CAVTと能力習得度を使用する。

CAVTは、①アクション(6項目)と②ビジョン(6項目)から構成される合成変数である。詳

細は表中に記載してある通りである。なお、各時点のCronbachの $\alpha$ 係数はそれぞれ0.800以上であり、内的整合性の高い変数であることを確認している。

能力習得度は、ベネッセ総合教育研究所の「大学生の学習・生活実態調査」で使用されている質問項目を参考にして作成した。内容は、初年次(キャリア)教育で育成されると予想される11個の能力項目である(大学生に求められる汎用的な能力)。11個の質問項目(各4件法)それぞれについて、「とても身につけている」=4～「まったく身につけていない」=1として因子分析(主因子法、プロマックス回転)にかけたところ、第1～3波調査において若干異なる因子構造になった。本稿では、表中にある通り、学術的基礎能力と社会的能力の2つの因子に区分し、各因子に相当する質問項目について、上述した得点の平均値を算出した。なお、各時点のCronbachの $\alpha$ 係数はそれぞれ0.700以上であり、内的整合性が一定以上の変数であることを確認している。

#### 5. 分析

##### 5.1. CAVTの推移

まず、CAVTの推移を分析する。

図1は、第1～3波調査までの(CAVT)アクションと(CAVT)ビジョンの得点(平均値)の推移をまとめたものである。それによれば、(CAVT)アクションと(CAVT)ビジョンは、第1～3波調査において微増傾向にあることがわかる。いずれについても分散分析によれば、時点間の得点には有意差がある。

表1. 基本的な属性の分布

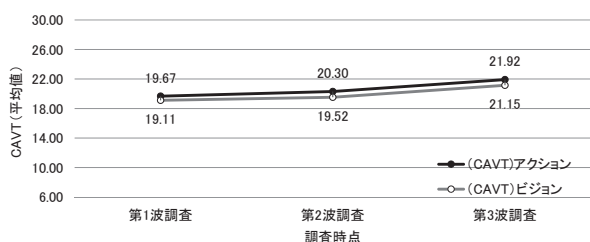
属性	履修登録者 (N=462)	第1波調査の回答者 (N=457)	第2波調査の回答者 (N=410)	第3波調査の回答者 (N=388)
1) 性別	男性55.4%、女性44.6%。	男性55.1%、女性44.9%。	男性54.4%、女性45.6%。	男性53.4%、女性46.6%。
	経済学部12.3%、 経営学部14.9%、 法学部7.1%、 現代社会学部18.4%、	経済学部12.3%、 経営学部15.1%、 法学部7.2%、 現代社会学部18.2%、	経済学部12.0%、 経営学部15.1%、 法学部7.8%、 現代社会学部19.0%、	経済学部10.3%、 経営学部16.0%、 法学部7.7%、 現代社会学部18.0%、
2) 学部	外国語学部24.5%、 文化学部12.1%、 理学部2.8%、 情報理工学部6.5%、 総合生命科学部1.3%。	外国語学部24.7%、 文化学部11.8%、 理学部2.8%、 情報理工学部6.6%、 総合生命科学部1.3%。	外国語学部23.4%、 文化学部12.0%、 理学部3.2%、 情報理工学部6.3%、 総合生命科学部1.2%。	外国語学部25.0%、 文化学部12.9%、 理学部3.1%、 情報理工学部5.7%、 総合生命科学部1.3%。

注：小数点の丸めのため、合計が100.0%にならない箇所がある。

表 2. 分析で使用する変数の操作的定義

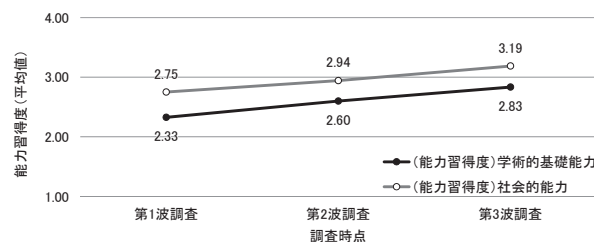
変数名	操作的定義
(CAVT) アクション	次の 6 個の質問項目 (各 5 件法) について、「かなりできている」=5 ~ 「できていない」=1 として合算した (理論上の範囲は 6 ~ 30)。 ①学外の様々な活動に熱心に取り組む ②尊敬する人に会える場に積極的に参加する ③人生に役立つスキルを身につける ④様々な人に出会い人脈を広げる ⑤何ごとにも積極的に取り組む ⑥様々な視点から物事を見られる人間になる
(CAVT) ビジョン	次の 6 個の質問項目 (各 5 件法) について、「かなりできている」=5 ~ 「できていない」=1 として合算した (理論上の範囲は 6 ~ 30)。 ①将来のビジョンを明確にする ②将来の夢をはっきりさせ目標を立てる ③将来、具体的に何をやりたいかを見つける ④将来に備えて準備する ⑤将来のことを調べて考える ⑥自分が本当にやりたいことを見つける
(能力習得度) 学術的基礎能力	次の 8 個の質問項目 (各 4 件法) について、「とても身につけている」=4 ~ 「まったく身につけていない」=1 として平均値を算出した (理論上の範囲は 1 ~ 4)。 ①問いと仮説を立てる力 ②大学の学習に必要な文献を探す力 ③文献や資料にある情報を正しく理解する力 ④文献を批判的に読む力 ⑤自分の知識や考えを文章で論理的に書く力 ⑥自分の知識や考えを図や数字を用いて表現する力 ⑦コンピュータを使ってデータを作成・整理・分析する力 ⑧コンピュータを使って文書・発表資料を作成し表現する力
(能力習得度) 社会的能力	次の 3 個の質問項目 (各 4 件法) について、「とても身につけている」=4 ~ 「まったく身につけていない」=1 として平均値を算出した (理論上の範囲は 1 ~ 4)。 ①異なる意見や立場をふまえて、考えをまとめる力 ②人と協力しながら物事を進める力 ③自分の言いたいことを口頭で伝える力

注：CAVT (Career Action-Vision Test) は、下村ほか (2009) が開発したキャリア教育の効果測定のための指標 (尺度) である。



注1: (CAVT) アクションの第1~3波調査における各Nは、356、354、357である。  
 注2: (CAVT) ビジョンの第1~3波調査における各Nは、354、354、356である。

図 1. CAVT の推移



注1: (能力習得度) 学術的基礎能力の第1~3波調査における各Nは、356、354、356である。  
 注2: (能力習得度) 社会的能力の第1~3波調査における各Nは、357、358、356である。

図 2. 能力習得度の推移

ただし、時点間の差は小さい。(CAVT)アクションについては、効果量である $\eta^2$ は0.045である。また、(CAVT)ビジョンについては、 $\eta^2$ は0.029である。多重比較(Tukey法)によると、(CAVT)アクションについては、第1波調査と第2波調査の間に有意差はなく、第2波調査と第3波調査の間、第1波調査と第3波調査の間に有意差がある。(CAVT)ビジョンについても同様である。

## 5.2. 能力習得度の推移

次に、能力習得度の推移を分析する。

図2は、第1～3波調査までの能力習得度の得点(平均値)の推移をまとめたものである。それによれば、(能力習得度)学術的基礎能力と(能力習得度)社会的能力は、第1～3波調査において上昇傾向にあることがわかる。いずれについても分散分析によれば、時点間の得点には有意差がある。

(能力習得度)学術的基礎能力の $\eta^2$ は0.143であり、時点間の差は大きいと考えられる。(能力習得度)社会的能力の $\eta^2$ は0.094であり、時点間の差は一定程度あると考えられる。多重比較(Tukey法)によると、(能力習得度)学術的基礎能力については、第1波調査と第2波調査の間、第2波調査と第3波調査の間、第1波調査と第3波調査の間に有意差がある。(能力習得度)社会的能力についても同様である。

## 5.3. 考察

以上の分析結果について考察する。

第1に、2つのCAVTにおいて第1波調査と第2波調査の間に有意差がみられなかったのは、第2波調査の時点では本格的なグループワークが始動しておらず(2章を参照)、他者との関係性の中で自己理解をする機会が少なかったからであると考えられる。一方、アクションと比べてビジョンの変化が小さかったのは、週1コマの授業で学生の意識を変えることは難しいということを示唆しているように思われる。

第2に、2つの能力習得度が第1～3波調査にかけて上昇傾向にあったのは、自分なりの問いを立て、それを解くという大学ならではの学びを少なくない学生が体験できたからであると考えられる。具体的には、「自己大」の前半のパートで社会人に対する聞きとり調査によるレポートの執筆が課されたこと、後半のパートでグループワークによるポスター発表が課されていたことが関係している可能性がある。2018年度は、後者において問い、仮説、仮説の検証という過程を体験するポス

ター発表のテンプレートを作成したため、多くの学生が特に学術的な学習を疑似体験できたものと推測される。

## 6. 結論

本稿では、授業の履修者に対する質問紙調査によって、初年次キャリア教育科目における学生の成長過程はどうなっているのかという問いを明らかにしてきた。本稿の主な知見は、次の2点にまとめることができる。

第1に、(CAVT)アクションと(CAVT)ビジョンは、第1～3波調査において微増傾向にあったものの、時点間の変化は小さかったという点である。

第2に、(能力習得度)学術的基礎能力と(能力習得度)社会的能力は、第1～3波調査において上昇傾向にあったという点である。また、これらの能力(特に前者)は第1～3波調査にかけて順次上昇傾向にあった。

以上から、本稿の結論は、初年次キャリア教育科目において学生のキャリアに関する行動や意識はそれほど変化しない一方で、大学生に求められる汎用的な能力は向上する可能性があるということになる。

本稿は、あくまでCAVTと能力習得度の推移を記述したことに留まっている。今後の課題は、時点間の変化の要因を分析することである。

## 謝辞

本稿の質問紙調査にご回答いただいた学生の方々、質問紙調査の実施にご協力いただいた担当教員の方々に厚くお礼申し上げます。

本稿は、2018年度京都産業大学教育プログラム支援制度の採択を受けて行った活動による成果の一部である。

## 参考文献

- 小山治(2013)初年次教育としての学習技法型授業の効果——1年生と4年生の共時比較. 大学評価研究 12: pp.121-130
- 小山治(2014)初年次教育におけるレポート執筆に関する学習行動の促進——授業履修者に対するパネル調査による検証. 大学教育研究ジャーナル 11: pp.1-13
- 小山治(2017)初年次教育におけるレポートを書く力の向上要因——授業履修者に対する3時点にわたる質問紙調査による検証. 大学教育実践ジャーナル

15: pp.1-8

- 桑原千幸, 喜多敏博, 合田美子, 根本淳子, 鈴木克明  
(2014) 初年次キャリア教育科目における相互評価  
学習の実践と進路選択自己効力の向上. 日本教育工  
学会論文誌 38 (2) : pp.79-89
- 中室牧子 (2015) 「学力」の経済学. ディスカヴァー・  
トゥエンティワン, 東京
- 中室牧子, 津川友介 (2017) 「原因と結果」の経済学  
——データから真実を見抜く思考法. ダイヤモン  
ド社, 東京
- 中沢正江, 松尾智晶 (2017) 自己発見と大学生活——  
初年次教養教育のためのワークブック. ナカニシヤ  
出版, 京都
- 乙須翼, 細野広美 (2018) 初年次キャリア教育科目に  
おける学生のグループワーク経験——アクティブ・  
ラーナーの基盤形成という視点から. 長崎国際大学  
教育基盤センター紀要 1: pp.1-13
- 下村英雄, 八幡成美, 梅崎修, 田澤実 (2009) 大学生  
のキャリアガイダンスの効果測定用テストの開発.  
キャリアデザイン研究 5: pp.127-139

Learning score

---

2019年1月9日受理

1 Center for General Education, Kyoto Sangyo  
University

---

## The Growth Process of University Students during a First-year Career Education: A Questionnaire Survey of Students who Took the Class of Kyoto Sangyo University

---

Osamu KOYAMA<sup>1</sup>

The purpose of this paper is to examine the growth process of university students during a first-year career education by conducting a questionnaire survey of students who took the class of Kyoto Sangyo University. The main findings are twofold. First, the scores of CAVT (Career Action-Vision Test) which were the index for measuring the effect of career education increased only slightly. Second, the learning scores of academic skills and social skills were improved consecutively. In conclusion, the findings suggest that the action and vision of students hardly change during a first-year career education and that the mastery of their generic skills is improved.

KEYWORDS: First-year career education, Growth process, Career Action-Vision Test,